

## 第十四章 女三の宮の物語 蹴鞠の後宴

[第一段 蹴鞠の後の酒宴]

大殿御覧じおこせて(殿が階段に居る二人に目を遣りなさって)、

「上達部の座、いと軽々しや(長官の席が其処では粗末に過ぎる)。こなたにこそ(此方にお出でなさい)」

とて、対の南面に入りたまへれば、みなそなたに参りたまひぬ(と仰って、寝殿から東の対の南廂にお入りなされたので、二人もそちらに参上なさいました)。宮もみ直りたまひて、御物語したまふ(兵部卿宮も殿と対座直しなさって、お話しなさいます)。

次々の殿上人は、簀子に円座召して(それ以下の高官たちは縁側に丸ごさを敷きなさって)、わざとなく(儀式張らずに)、\*椿餅、梨、柑子やうのものども(菓子類を)、さまざまに箱の蓋どもにとり混ぜつつあるを(それぞれの箱の蓋でいくつかに盛り合わせてあるのを)、若き人びと\*そばれ取り食ふ(若い公子たちは談笑しながら摘まみ食らう)。さるべき\*乾物ばかりして(そうした乾き物ばかりを肴にして)、御土器参る(御酒が進みます)。\*「椿餅」は「つばいもちひ」と読みがある。「つばいもちひ」は「つばいもち、つばきもち」のことで唐菓子の一。餅の粉に甘葛(あまずら)をかけ、丸く固めて椿の葉2枚で包んだもの。>と大辞泉にある。「なし」は注にく春三月に梨の実があるとは思われない。梨を使った加工食品であろうか。>とある。梨の花はく春の終わりごろ、白い5弁花をつけ>と大辞泉にあり、春の季語とも記されているので、季節柄で言えば、その花を模した白い餅菓子、ぐらいだろうか。「柑子(かうじ)」はくコウジミカン>。何れ、「やうのものども」とあるので<菓子類>で括る。\*「そばる」は「戯る」と表記されくたわむれる、じやれる>の意と古語辞典にある。バ行は破裂音なので乱雑感はあるが、現代語に繋がる語感だとく笑いをこぼす>あたりだろうか、「こそばゆい」や「うそぶく」などは類語かも知れない。\*「乾物」は「からもの」と読みがある。正にくカンブツ、乾き物>で、今でも「乾き物で一杯やる」というのはく手軽に酒を飲む>という意味で実際にも言い方としても、ごく日常的にあることだ。乾き物はその場での調理が不要なので、酒宴の時と場所を選ばない。

衛門督は(衛門府長官の藤君は)、いといたく思ひしめりて(とてもひどく思い沈んで)、ややもすれば(この場の話も上の空で、つい)、花の木に目をつけて眺めやる(庭の桜に目を遣ってぼんやりしています)。大将は(近衛府長官の源君は)、心知りに(藤君のその様子の訳を)、「あやしかりつる御簾の透影思ひ出づることやあらむ(思いがけずに見入った御簾の透影を思い出して居るに違いない)」と思ひたまふ(と思いなさいます)。

いと端近なりつる\*ありさまを(しかしその姫宮がいらっしゃった場所が、ごく縁側近くであったということ)、かつは軽々しと\*思ふらむかし(源君は半面で軽々しいと思ったのか)、\*「ありさま」に「御」が無い。ということは、この「ありさま」は姫宮の<御姿>ではなく、事件の<様態>だ。この文は、上に<宮の御ありさまの>が省かれている。下の内心文に「こなたの御ありさまの」とあるので、類似表記を避けたか。しかし、むしろ此処に「宮の御ありさまの」が明示されれば、下の「こなたの御ありさまの」という言い方がより生きるように私には思えるが、感性の違いは何も此処に限った事でも無い。\*「思ふらむ」は注にく主語は柏木。柏

木の心中を付度。>とある。「柏木の心中を付度」とは、源君が藤君の思いを推量した、ということらしいが、同意しない。与謝野文が是を、語り手が源君の考えを推量した文、と取っていて、同意する。この文の構成は、「思ふらむかし」「～と思ふに」「～と思ひ合はせて」「～と思ひ落とさる」という、語り手が源君の心中での論理展開を説明している。逐一に敬語が無いのは、客観的な論理推考文だからだ。なお、「かつは」は、宮への興味一方の衛門督に比して、大将も興味はあるが<その半面で>と姫宮を「軽々し」と批判している、という文意だ。

「いでや(いやはや)。\*こなたの御ありさまの(こちらの対の上の御心構えなら)、さはあるまじかめるものを(あんなことにはならないだろうに)」と思ふに(と思えば)、 \*「こなた」は注に<紫の上をさす。>とある。この注を指摘しながら、上の「思ふらむかし」を藤君の考え、と取るのは奇怪だ。

「かかればこそ(こんなことだから)、世のおぼえのほどよりは(世間に思われる身分の高さの程よりは)、うちうちの御心ざし(邸内に於ける父殿の御寵愛が)\*ぬるきやうにはありけれ(生半可なようであるのだろう)」と思ひ合はせて(と日頃見聞きする殿と宮の御夫婦仲の疎遠振りが納得できて)、 \*「ぬるし」は「温し」の他に「緩し」とも表記されるようで<温度が適切でない、どっちつかず>という語感。

「なほ(およそ嫁たるものは)、\*内外の用意多からず(心構えも身構えも未熟で)、いはけなきは(幼いのは)、らうたきやうなれど(可愛いようでも)、\*うしろめたきやうなりや(先が思い遣られるものようだ)」と、\*思ひ落とさる(と不始末をしがちな女を見下しなさいます)。 \*「内外の用意(うちとのようい)」は「御」が無いので一般論らしいが、女の、特に嫁入りの心得、ではありそうだ。「内外」は<内面と外面>。「用意」は<備え、準備>。 \*「うしろめたし」は<気後れする、不安に思う、劣りを気に病む>などだが、誰の何に対しての思いかで言い方は違って来る。此处では敬語が無いが、「やうなりや」と他人事なので源君自身の思いでもなさそうで、具体的に誰かの思いではないものの、朱雀院の失敗を言っているような語感だ。 \*「おもひおとす」は<見下す、見下げる>。「る」は大将への尊敬語。明らかに姫宮への非難だが、一般論としてでなければ、とても言えない悪口だ。

\*宰相の君は(良識あるべき参議でもある藤原君は)、よろづの罪をもをさをさたどられず(多くの欠点を少しも気付かず)、おぼえぬものの隙より(思いがけない物の弾みで)、ほのかにもそれと見たてまつりつるにも(仄かにも姫宮をそれとお見受け申し上げるにも)、「わが昔よりの心ざしのしるしあるべきにや(私の前からの誠意が天に通じた表われに違いない)」と、契りうれしき心地して(と縁があることを喜ぶ気持になって)、飽かずのみおぼゆ(宮への恋慕を募らせるばかりです)。 \*「宰相の君」は注に<柏木。宰相兼右衛門督である。初めて語られる。>とある。「官制大観」サイトによると、衛門督が参議の兼任なのは通常の任用だったようだが、確かに何故、此处でこういう呼称を持ち出すかは気になる。とりあえず<良識あるべき>を補語したが、それは「右衛門督」にして当然備えるべき資質であり、「宰相」を持ち出した作者の意図を汲むには、我ながら自信がない。ただ、「罪」も冗句っぽい語用に感じるので、幾分はそれなりだ。にしても、むしろ、藤原太政大臣家の長男を「柏木」と呼称する注釈には、改めて辟易する。仮に作者がそう規定していたとしても、この時点ではその規定は未だ語られていないので、是は後世の読者の解釈による規定呼称であり、このノートのような一読者の戯言や、一定の同趣味指向読者間内で符牒扱いされているのなら徒の勝手だが、一般的な注釈にそのような仲間符牒を使用されるのは、価値観の押し付けで傍迷惑だ。今まで語られてきた沿革から規定できるこの人物の一般呼称は、せいぜい<藤原の(長子)君>くらいだ。

[第二段 源氏の昔語り]

院は、昔物語し出でたまひて(殿は昔話を始めなさって)、

「太政大臣の(おほきおとどの、藤原殿が)、よろづのことにたち並びて(何にでも私と競い合  
って)、勝ち負けの定めしたまひし中に(勝ち負けをお決めなされた中で)、鞠なむえ及ばずなり  
にし(蹴鞠だけは私はとても彼に及びませんでした)。

はかなきことは(家の伝統と言っても、細かいことは)、伝へあるまじけれど(伝えられていな  
いのだろうが)、ものの筋はなほこよなかりけり(血筋というものはやはり特別に強く引き継がれ  
るもののようで)、いと目も及ばず(あなたの蹴鞠は、とても目で追えないほどの)、かしこうこ  
そ見えつれ(優れた足技に見えました)」

とのたまへば(と藤君に仰ると)、うちほほ笑みて(藤君は微笑んで)、

「はかばかしき方にはぬるくはべる家の風の(業務が渉る点に於いては思わしくない学業に劣  
る我が家の家風が)、さしも吹き伝へはべらむに(その通りに私にも吹き伝わっていると存じます  
が)、後の世のため(このような戯事に秀でて、後世の我が家の繁栄に)、異なることなくこそ  
はべりぬべけれ(特に役立つことはないと存じます)」

と申したまへば(と申しなされば)、

「いかでか(何の)。何ごとも人に異なるけぢめをば、記し伝ふべきなり(どんなことでも人に  
秀でた事柄は記録して後世に伝えるべき者だ)。家の伝へなどに書き留め入れたらむこそ、興は  
あらめ(いっそ公式の家伝書などに書き留めれば興味があるだろう)」

など、戯れたまふ御さまの(などと戯れなさる殿の御様子の)、匂ひやかにきよらなるを見たて  
まつるにも(内面からこぼれでるような美しさを押し申すにも)、

「かかる人にならひて(このような人に慣れ親しんで)、いかばかりのことにか心を移す人はも  
のしたまはむ(少しでも他の男に心を移す人がいらっしやるものだろうか)。何ごとにつけてか  
(どうしたら)、あはれと見ゆるしたまふばかりは(宮に私を気に掛けて頂けるように)、なびかし  
きこゆべき(仕向け申せようか)」

と、思ひめぐらすに(と藤君は思い巡らすに)、いとどこよなく、御あたりはるかなるべき身の  
ほども思ひ知らるれば(ますますこの上なく殿の存在がはるかに高い所にあるという我が身の程  
が思い知らされて)、胸のみふたがりてまかでたまひぬ(失意のままに六条院を後になさいます)。

[第三段 柏木と夕霧、同車して帰る]

大将の君一つ車にて(源君は藤君と一つ車に同乗して)、道のほど物語したまふ(帰りの道すが  
らお話し合いなさいます)。

「なほ、このころのつれづれには(やはり日頃の憂さ晴らしには)、この院に参りて、紛らはずべきなりけり(この六条院に参って気を紛らすのが良いでしょう)。今日のやうならむ暇の隙待ちつけて(今日のような暇な日を見つけて)、花の折過ぐさず参れ(花見の時期を逃さない内にまた来なさい)、とのたまひつるを(と六条院が仰ったので)、春惜しみがてら、月のうちに(春を惜しんでこの月の内に)、小弓持たせて\*参りたまへ(今度は的当て勝負をしたいので、小弓を供に持たせて参上しましょう)」 \*「まゐる」は六条院に対する謙譲。身分では、今や源君が藤君よりも高位なので、目上が目下に自家に誘う語用も有り得るが、源君にしても今の自邸は三条邸で六条院は離れた実家だし、源君と藤君の仲の二人きりの会話で、格式張る筈もない。「たまへ」は「たまふ」の命令形だが、「たまふ」が尊敬語・丁寧語なので、「たまへ」は強い命令には、厭味でなければ使わない。「たまへ」は特に会話では、丁寧な勧誘・誘導語として定句化した語用に見える。

と語らひ契る(と再来を約束し合います)。\*おのおの別るる道のほど物語したまうて(そのままお二人は、各々の別れ道まで会話なさったが)、宮の御事のなほ言はまほしければ(藤原君は姫宮についての話がどうしてもしたかったので)、 \*「おのおの別るる道のほど」は注に<六条院から夕霧の三条邸、柏木の二条邸へ帰る途中。>とある。六条院は四町歩で春の町の玄関は七条下る八条手前だから、三条通まで4~500mほど。

「院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな(院におかれてはやはりあの東の対の御部屋にばかりいらっしゃるようですね)。\*かの御おぼえの異なるなめりかし(あちらの御部屋様への御寵愛が格別なのでしょう)。この宮いかに思すらむ(姫宮のことは院はどうお思いなのでしょう)。帝の並びなく\*ならばしたてまつりたまへるに(朱雀院が他に並ぶ者無く格別大事に御育て申しなされていらしたというのに)、さしもあらで、\*屈したまひにたらむこそ(六条院は朱雀院ほどの御厚情が無く、宮が気落ちなさっているのが)、心苦しけれ(お気の毒です)」 \*「かの御おぼえ」の「かの」は上の「この対」に続く言葉なので、「御おぼえ」が注にある<源氏の紫の上に対する寵愛。>であることは分かる。ところで、藤君は紫の上を<対の上>とは呼ばないようで、出来るだけ客観表現の主語を補語すべき現代語の語用としては、藤君が意図してなのか、他家だから当然なのか、はともかく、此处では実際に紫上を「上」と呼ばない事を表示する為に紫上を<御部屋様>として置く。と、凶らずも、でもないが、紫君の客観的立場が浮かび上がる。 \*「ならばす」は<学ばせる。習わせる。>または<習慣づける。慣れさせる。>と大辞泉にある。教育する、に近いのかも知れないが、朱雀院に対して藤君が臣下として「かしづく」という語を使えないための言い方と見て、意味は「かしづく」の<大事に育てる>と取る。 \*「屈す(くっす)」は<気がふさぐ。>と大辞泉にある。気落ちして屈みがちになる、語感。

と、\*あいなく言へば(と無礼にも切り出すと)、 \*「あいなし」は<不都合だ>。注には、此処の語りを<『全集』は「ずけずけと堰を切ったように繰り出される柏木の言葉について、これを不穏当とする語り手の気持をこめる」と注す。>としてある。確かに、宰相兼右衛門督という貴人に「言へば」という言い方は非難がましい。なので、「あいなし」を六条院に対して<無礼だ>と取る。

「\*たいだいしきこと(とんでもない誤解だ)。いかでかさはあらむ(何でそんなことがありましよう)。 \*「たいだいし」は形容詞で<あるまじきことだ。もつてのほかだ。>と大辞泉にある。「あるまじきこと」となると是は、藤君の言うような殿の宮に対する冷遇があったとしたら、その冷遇が<あるまじきこと>であり、その殿の処遇の存在を「いかでかさはあらむ(そんなことはない)」と源君が否定した、のだろうか。私が受ける「たい

だいし」の語感は<とんでもない>で、是は殿に対しての形容としても成立するが、藤君の発言自体に対する形容としても成立する。語感では、敬意を感じないので後者だ。そして、その藤君の発言自体を「いかでかさはあらむ」と源君は否定した、のだろう。

\*こなたは(あの対の御方は)、さま変はりて生ほしたてたまへる睦びのけぢめばかりにこそあべかめれ(院が特別な形で育て上げなされた親しさという違いがあるからなのでしょう)。宮をば(院はそれこそ宮に対しては)、かたがたにつけて(ことある毎に)、いとやむごとなく思ひきこえたまへるものを(とても敬い申しなさっていらっしゃるものを)」 \*「こなた」は藤君の言った「院にはなほこの対にのみ」を受けた発言なので<対の上>のことだが、源君が藤君に対して「対の上」を「上」の心算で言ったのかどうかは疑問だ。藤君の発言を受けているのだから、その語意を正さずに応えた場合は、前言者の語意をそのまま引き継ぐのが普通で、藤君は紫君を<御部屋様>くらいに、とはいえ一切の明示をしない言い方で、少なくとも敬意は避けて話していたので、さすがに源君は「こなた」と丁寧且つその人と特定して紫君を言い表してはいるが、他家の者への礼儀もあってか、「上」とまでは敬っていない気がする。また、源氏殿のことについても、立場上は<父君>ではなく「院」という言い方をしたのだろう。

と語りたまへば(と源君がお話しなさると)、

「いで、\*あなかまたまへ(いや、止めてくれ)。皆聞きてはべり(みんな聞いているんだから)。いと\*いとほしげなる折々あなるをや(女房目にも、とても思わしくなさそうなことが度々あるそうじゃないか)。\*さるは(しかしそれは)、世におしなべたらぬ人の御おぼえを(並ぶ者なき宮への朱雀院の御厚情を)、ありがたきわざなりや(無にするものじゃないか)」 \*「あなかまたまへ」は、ほぼ定型句の<黙って下さい>という言い方と古語辞典にある。「あなかま」が<ああやかましい→うるさい→静かにしろ>で、「たまへ」は丁寧語だから<黙れ>の丁寧な言い方。ただ、「黙ってくれ」も厳しい制止で、兄弟同然の二人の仲なら有り得るとは思うものの、それならいっそ<黙れよ>くらいのほうが親しみがあるし、近衛府と衛門府の長官同士という品性を思うなら<お止め下さい>くらいが現代語らしい。で、中を取る。 \*「いとほしげ」の「げ」は女房などからの伝聞で、藤君が自分で見知った事ではないから、姫宮自身の形態としての敬語が無く、あいまいなくそれらしい状態>という言い方。であれば、「いとほし」を<可哀相だ、気の毒だ、いじらしい>などと姫の形容には取り難い。是は事象に対する状況判断として<困った事態、不都合な状態>を意味し、より曖昧な総じて<思わしくないこと>という言い方と取って置く。 \*「さるは」は<上の叙述を受けて、実相実態を説明し出す接続詞>と古語辞典に説明がある。だから文意によって、順接の<実は、というも、というのは>だったり、逆接の<しかし、そうであっても、実は>だったりする、ようだ。この文の構文は「さるは在り難き業なりや」で、是だけなら<それは在り得ない事だ>くらいの言い方だ。が、是では「さるは」は単なる語調でしかない。が、此処に挿入された「世におしなべたらぬ人の御おぼえ」は、前言から少し間が空いてしまって「在り難し」の対象体が分かり難くなったので、藤君が改めてそれを言い直したものだ。つまり、「さ(あ)るは」の「さ」が既述の何を指しているかを示しているワケだ。で、言い直された「世におしなべたらぬ人の御おぼえ」という対象体に該当する前言を顧みれば、是はどうやら「帝の並びなくならしたてまつりたまへる」に近いので、このことらしい。で、「世におしなべたらぬ人」は<姫宮>で、「御おぼえ」は<朱雀院の御厚情>だ。ということは、この「さるは～を～なりや」は<しかしそれは～を～してしまうではないか>という言い方になっているようだ。

と、いとほしがる(と藤君は不満げです)。

「いかなれば花に木づたふ鶯の、桜をわきてねぐらとはせぬ（和歌 34-21）」

「どうして春の鶯が、春の桜にとまらない（意識 34-21）」

\*注に＜柏木の歌。花を六条院の女君に、鶯を源氏に、桜を女に喩え、源氏が女三の宮を大事にしないことを非難する。＞とある。この歌は、源氏殿を揶揄しているような遊び心は有りそうだが、それだけでは失礼この上ないので、幾分かの風情や言葉遊びに掛けられていないと成立しないような気がする。だから多分、下敷きは「梅に鶯」の決まり文句なのだろう。梅は春の訪れを知らせる花で、ウグイスは春告鳥だ。しかし、今や、特にこの晩春にあっては、春の花と言えは桜ではないか。何故、春の鳥であるウグイスが、春の花である桜を「ねぐら＝本拠地」にしないのか、というのが歌意らしく、下の添え句にそう明示されている。「桜を別きてねぐら問はせぬ」は＜桜を特別な相手先に問い合わせない＞だろうか。都々逸風だが、藤原君ならきっと歌論ぶったハイブローなんだろう。

\*春の鳥の、\*桜一つにとまらぬ心よ（梅に鶯などと、春の鳥が春の花の桜を取り合わせに定めない歌心とは）。あやしとおぼゆることぞかし（まったく世の中どうかしてるんだ）」 \*「春の鳥」は歌に詠んだウグイスであり、源氏殿を喩えたものだが、この「春の鳥」の語感自体に＜春の町の大殿＞は込められているのだろう。 \*「桜」は歌に詠んだ姫宮だが、今日の蹴鞠の舞台として桜吹雪が舞った＜寝殿の前庭の風情＞を強く思わせる。「桜一つに」は、他を除いて＜桜だけに＞という言い方らしい。春の花といえば桜なのだから、という前提での物言いなのだろう。

と、口ずさびに言へば（と藤原君が書くほどのことも無く、歌めいた物言いをすると）、

「いで、あな、あぢきなもの扱ひや（いやまあ困った物言いだ）、さればよ（やっぱり、藤君は姫宮に思った通りの懸想ぶりだ）」と思ふ（と源君は思います）。

「深山木にねぐら定むるはこ鳥も、いかでか花の色に飽くべき（和歌 34-22）」

「山がねぐらのカッコーも、里の桜がまたケッコー（意識 34-22）」

\*注に＜夕霧の返歌。「花」「ねくら」の語句を受け、「鶯」は「はこ鳥」として返す。深山木を紫の上に、はこ鳥を源氏に、花を女三の宮に喩える。春の美しい花に飽きたりはしない、と反論。＞とある。「はこ鳥」は＜カッコウドリ的一名という。＞と古語辞典にある。不確からしいが、「カッコー」と「ハコ」の音感は近い。カッコーとケッコーのオヤジギャグから逃れる術も無い。

わりなきこと（宮の御不幸は誤解です）。ひたおもむきにのみやは（思い込みに過ぎません）」

といらへて（と応えて）、わづらはしければ（源君は面倒なので）、ことに言はせずなりぬ（藤君にそれ以上は言わせないようにしました）。異事に言ひ紛らはして（別の話に言い紛らわせて）、おのおの別れぬ（各々別れました）。

[第四段 柏木、小侍従に手紙を送る]

\*督の君はなほ（かんのきみはなほ、藤原君は未だ）、大殿の東の対に（おほいどののひんがしのたいに、太政大臣邸の東の対屋に）、独り住みにてぞものしたまひける（一人暮らししていらっし

やいます)。 \*注にく柏木は大殿邸の東の対にまだ正妻を迎えず独り身で住んでいる。>とある。26歳くらいと推定されるので、当時としては相当な晩婚になるのだろう。いや、遊び女はいるのだろうが、源君が複数の子持ちらしいことに比しても、婚外子さえいない様子だ。子が無いと言えば、今上帝も23歳になった筈だが、梅壺中宮との間にも、弘徽殿女御との間にも、その他の女御や更衣との間にも子は居ないのではないか。因みに、中宮32歳、弘徽殿女御24歳、さらに源君20歳、その北の方22歳。

\*思ふ心ありて(思うところがあって)、年ごろかかる住まひをするに(長年こうした独身生活をして居るが)、人やりならずさうざうしく心細き折々あれど(自分で選んだ生き方ながら人恋しく心細い時があっても)、 \*「思ふ心ありて」は注にく『完訳』は「結婚への高い理想。女三の宮のような高貴な女君との結婚を望み独身を貫く。「わが身かばかり」「心おごり」ともあり、彼の宮への執着は、権勢志向に発していた」と注す。>とある。ただ、藤氏長者の家格として撰閥家を目指すのは、当時の時勢としては当然の責務であり、藤君は長者家の長男として、その期待に応えるべき圧力を自らに課して「思ふ心」たらしめていた、ようにも見える。つまり、撰閥家とは政治実権を執る者であり、その座を競う宿命は逃れようも無いが、闘争であれば負ける時もあるのであり、自分の足跡を確実に残すためには、目下の闘争は当然に諸情勢を見極めながら勝利を目指すものの、ともかくは権威の源泉である王家の畑に自分の種を植え付けることが肝心だ、と藤君が思ったとしても無理はないように見える。で、種を植えるには、政治的な立場は一先ず置いて、自分が最も王家らしいと思える畑にこそ、万感の思いを込めて射精したい、と生命体としての男冥利を賭けて藤君が思ったなら、それは政治的な立場が危ういが故に王家の権威に縋った光君の姿に重なる。

「わが身かばかりにて(自分の身分はこれほど高いので)、などか思ふことかなはざらむ(どうして王家との結婚という願いの叶わぬ事があるか)」

とのみ、心おごりをするに(との一点張りで高望みするのだが)、この夕べより屈しいたく(この夕べからは弱気にひどく襲われて)、もの思はしくて(沈みがちで)、

「いかならむ折に(どういう時にか)、またさばかりにても(またあれくらいの垣間見でも)、ほのかなる御ありさまをだに見む(仄かに宮の御気配だけでも見たいものだ)。ともかくもかき紛れたる際の人こそ(何でも人目に紛れて目立たないような低い身分の女なら)、かりそめにもたはやすき物忌(適当な理由付けで謹慎日としたずる休みや)、方違への移ろひも軽々しきに(悪い方角除けを理由にした夜の外出も気楽に出来るので)、おのづからともかくもの隙をうかがひつくるやうもあれ(そんな事で何とか会う時間を作ることも出来るが)」

など思ひやる方なく(などといった方策を宮との逢引では立てることも出来ず)、

「\*深き窓のうちに(深窓の内側に)、何ばかりのことにつけてか(どういう方法で)、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべき(私がこんな深い思いで居るとだけでもお知らせ申すことが出来ようか)」 \*「深窓の麗人」は、注にく「楊家有女初长成 養在深窓人未識(養はれて深窓に在れば人未だ識らず)」(白氏文集・長恨歌)を踏まえた表現。>と出典指摘がある。

と胸痛くいぶせければ(と胸が痛んで晴れないので)、\*小侍従がり(小侍従の許に)、\*例の文やりたまふ(例によって手紙を遣します)。 \*「小侍従」は、十三章三段に「衛門督の君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れたまひし人なれば、この宮を父帝のかしづきあがめたてまつりたまひし御心おきてなど、詳しく

見たてまつりおきて、さまざまの御定めありしころほひより聞こえ寄り」とあり、「その折より語らひつきにける女房」として「常にこの小侍従といふ御乳主をも言ひはげまして」と語られていた、藤君が頼り先にしている宮付きの女房だ。「がり」は古語辞典に〈処在り(かあり)の約。〉と解説され、その連用名詞で〈その人の居る所に、その人の許に〉という意味で語用される、と示されている。\*「例の」は注に〈「例の」とあるので、初めてでない。今までにも度々あったことを暗示する書き方。〉とある。が、連絡係なのだから「度々あったこと」は暗示ではなく、既に明示されている。問題はむしろ、「ふみ遣り給ふ」の語感だ。「文奉り給ふ」なら完全に姫宮宛ての手紙を小侍従に託すのだが、「遣り給ふ」は当然ながらの姫宮への懸想文を、その取り計らいも含めて任せるという形で、藤君は小侍従に相談を持ち掛ける、という言い方だろうか。この辺の人間関係性が良く分からない事と、此処の「がり～遣り給ふ」という見慣れない言い方とで、文意がいやに分かり難い。

「一日(ひとひ、先日)、\*風に誘はれて御垣の原をわけ入りてはべしに(春風に誘われて御園の六条院南庭に遊びましたが)、\*いとどいかに見落としたまひけむ(いよいよ無様な所をお見せして、どんなにか見下しなされたことでしょう)。\*風に誘はれて御垣の原を」は、出典参照に〈「ふるさと」は春めきにけりみ吉野の御垣の原を霞こめたり」(詞花集春-三 平兼盛)〉が指摘され、注に〈「御垣の原」は吉野の地名、歌枕だが、六条院をさす。〉と指摘がある。下敷き歌に「春めきにけり」とあるのだから、この「風に誘はれて」は与謝野文にあるように〈春風に浮かされまして〉くらいに言わないと、作者の意図を汲む言い換えにならない。「御垣の原(みかきのはら)」は古語辞典に「御垣が原」として〈皇居の外郭を成す築垣あたりの野原。もとは吉野離宮についてのみ言ったが、後には京都の皇居についても言った。〉とあり、此処では更に〈宮中や貴人の邸宅の築垣あたりの野原。また、宮中や貴人の邸宅の庭。〉(大辞泉)の意の語用ということらしい。\*「いとどいかに見落としたまひけむ」は謙遜した言い方だが、真意は謙遜ではない。是は言い回しとして〈見つともない所をお見せして恥ずかしい限りです〉という意味の定句、のようなものだ。つまり、藤君は「わけ入りてはべしに」に〈蹴鞠で遊んだが〉の意を込めているのであり、宮付きの女房である小侍従なら当然にその場に居たか、その時の話を伝え聞いているかしているに違いない、という思い込みを前提にこの手紙を書いている。のであり、その時の自分の活躍を謙遜口調で、小侍従にではなく、姫宮に自慢しているワケだ。が、小侍従はその事情を知らなかった、というオチが下にあるので、「蹴鞠」というネタバレのウカツな補語は出来ない。

\*その夕べより(その日の夕方から)、乱り心地\*かきくらし(取り乱した気分で悲観し)、\*あやなく今日は眺め暮らしはべる(遣る瀬無く今日は物思いに沈んで暮らしています) \*「その夕べ」の「その」は、蹴鞠の後で正面階段で休んでいた時に、猫騒動で宮の御姿を垣間見た、という事情、を藤君は意図している。が、是も小侍従の知らない事情ということで、此処は藤君の道化ぶりを描いた語りのようなのだが、「蹴鞠」のような伏字で引っ張るのは普通は小ネタだ。が、是が更なる事件の御膳立てだとしたら、むしろ小侍従の世情への疎さを、小ネタでくすぐりながらの語りで蒔いて置く、という練れた話術なのかも知れない。\*「かきくらし」は〈一面を暗くする〉で、大雪で空く一面を暗くする〉や、悲観して胸く一面を暗くする〉などの語用があり、此処では後者。「かく」は水をかくく〉の「掻く」で、広い面を作用する語感。\*「あやなし」の「あや」は〈筋目〉で、「筋目が無い」とは〈手掛かりが掴めず目的にたどり着けない=遣る瀬ない、解決できない〉。また、この「あやなく今日は眺め暮らしはべる」という言い回しは、注に〈「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ」(古今集恋一、四七六、在原業平)を踏まえた表現。〉と参照指摘がある。この歌の味わいは、わざわざ六文字にまでした「見ずもあらず」にあるのだろう。一字余りだから音感上は「見」を食って第一小節に入るわけで、それで先ず前倒り感が出るし、「ず・ず」と歯合わせ音のザ行の重ねは切迫感ないし焦燥感を煽る。語意で見ても、「見ずもなく」なら「なし」は論理否定なので〈見なかったわけではないが〉という他事情による言い訳を留保した言い方で話の焦点がぼけるが、「見ずもあらず」の「あらず」は事実否定なので〈見なかったとは言えないが〉という否定の否定



でく見たことは確かだが>という事実確認をしていて、次に続く話の対象が「見たこと」に絞られる、という分かりやすさだ。「見もせぬ人」は意外に分かり難いが、「見る」は<理解する、分かる>でもあるので、「見もせぬ」を<分からなかった←良く見えなかった>と逆推して現代語の「見る」に繋げるのも邪道ではないだろう。だから歌筋は<見たことは確かだが良くは見えなかった人が恋しくて逢う手立ても見つからないまま今日は思い悩むんだらうなあ>で、正にこの日の藤原君の心境そのものだ。が、それだけなら、何も丸々この歌を引き合いに出すまでのことはない。ただ同じ事を準えるだけのために、この作者が古歌を引くものか。何かある、と睨んで早速に「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、この歌には「右近のむまばのひをりの日、むかひにたてたりける車のしたすだれより女の顔のほのかに見えければ、よんでつかはしける」との詞書がある、と教えられた。「ひをり」は古語辞典に「引折、日折」と表され<五月の五日に左近衛の舎人が、六日に右近衛の舎人が、馬場で試射したこと。>とある。で、「右近の馬場の日折の日」とは在原業平が875年に<右近衛権中將に転任>とWikipediaにあるので、その近年の五月六日の出来事っぽい。だから如何だと言う実感は何も無いが、其処まで直ぐに調べられるWebというもののや、そういう資料がある人物ということに、少し感じ入る。藤君は今は宰相兼右衛門督だが前職は右近の中將だったので、ますますこの歌を引く情緒が深まる。が、まだ何か足りない。と、「古今和歌集の部屋」サイト当該ページに、この業平の476番の歌には477番にその「返し」がある、と説明されている。その477番の歌は、「知る知らぬ なにかあやなく わきて言はむ 思ひのみこそ するべなりけれ(読人知らず)、とある。この返歌は<知るの知らぬのと何を意味無く分けて考えているのか、恋しいと思うことこそが恋の道するべだらうに>と、好きなら押しまくれと急ぎ立てていて、冷やかしくとも囃したてとも取れるような文句だが、藤君は当然にこの返歌までを承知していて、是を自分の勇気付けにしていることは間違いない。で、是が、業平の引歌を引いた作者の意図だ。つまり、藤君はこの猫騒動を契機に過ちも覚悟して突っ走ろうという決意表明の心算で小侍従に相談を持ち掛けた、という作文だ。そして、小侍従はそれに気付かない、という波乱含み。更に、姫宮の反応は如何に、と読者の興味を誘う手馴れた筆致、らしいぞ。

など書いて、

「よそに見て折らぬ嘆きはしげれども、なごり恋しき花の夕かげ」(和歌 34-23)

「よそに見るほど繁る木の、夕日の花の罪深さ」(意識 34-23)

\*注に<柏木から女三の宮への贈歌。「嘆き」に「投げ木」を響かせ、「木」の縁語として「折る」「繁る」「花」の語句を引き出す。「花」は女三の宮の美しさをいう。>とある。歌筋は<他所の家の庭だから折れないものと諦めた木は茂っているが忘れられない夕方に見た花の美しさだ>だろうか。一度は結婚を諦めたが、今でもあなたが忘れられない、みたいな歌意だろうか。それは、確かに藤原君の立場を良く示してはいる。が、投げ木は繁れど名残りは恋しい、という言い方に、嘆きは深い忘れられない、という意味しか乗せられていないのだろうか。行け行けドンドンの決意表明にしては、どうも物足りない。何か見落としが有りそうだが、今は分からない。

とあれど、侍従は一日の心も知らねば(侍従は蹴鞠も猫騒動もその日の事情を知らなかったのだ)、ただ世の常の眺めにこそはと思ふ(この手紙を、ただ藤君の普段の姫宮への恋慕だらうと思うのです)。

[第五段 女三の宮、柏木の手紙を見る]

御前に人しげからぬほどなれば(宮の御前に女房が少ない時だったので)、かの文を持って参りて(小侍はその藤君の手紙を持って参って)、

「\*この人の(衛門督の君が)、かくのみ(このようにばかり)、忘れぬものに(宮様を忘れられないと)、言問ひものしたまふこそわづらはしくはべれ(手紙を遣しなさるので困っております)。心苦しげなるありさまも\*見たまへ(君の苦しそうな胸の内を拝せば)\*あまる心もや添ひはべらむと(私も出過ぎた事もしでかさないかと)、みづからの心ながら知りたくなむ(我ながら分からなくなるほどです)」 \*「この人」は藤原君だが、姫宮の認識としては、その個人的な人物像は未だ知らないで<宰相兼右衛門督>という役職や身分で、「この人」を認識する他はないだろうと、此处では「この人」を<衛門督>と表示する。 \*「見たまへ」の「給ふ」は小侍の衛門督の君に対する謙譲語。 \*「あまるころ」は<持て余す気持=困り果てて>と<分を越えた裁量=出過ぎた仕業>の複意で<夜這いの手引き>を暗示するのだろう。注には<小侍が柏木を手引きしかねない気持ちがおこりはしないかと、という意。>とある。姫宮にも、このくらの冗談は通じるらしい。

と、うち笑ひて聞こゆれば(と笑いながら冗談を申し上げれば)、

「いとうたてあることをも言ふかな(随分な問題発言だわね)」

と、何心もなげにのたまひて(と姫宮は気軽に応じなさって)、文広げたるを御覧ず(小侍が広げた衛門督の手紙を御覧になります)。

「\*見もせぬ」と言ひたるところを(衛門督が「良く見えなかった」という意味の事を書いているところを)、あさましかりし御簾のつまを思し合はせらるるに(猫騒動で自分の姿が顕わになった御簾の縁の事を思い合わせられなされば)、御面赤みて(おんおもてあかみて)、大殿の(おほとこの、源氏殿が)、\*さばかりことのついでごとに(何度も事ある毎に)、 \*「見もせぬと言ひたるところ」という言い方は、藤君が書いた「あやなく今日は眺め暮らしはべる」という文面が、在原業平の「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ」を引いたものだと、姫宮にも分かった、ということの意味している。また、此处で改めて、先の引歌指摘が必脚だったと分かった訳だが、「見もせぬ」は<見ようもしない>ではなく<良くは見えなかった>だから、宮が気にするなら「見ずもあらず(見たことは見たが)」の方かと思うが、それはどちらであれ、「見ずもあらず見もせぬ人」の「人」が自分だということに気づいたわけで、自分が思っていた以上に見られていたのかも知れない、と宮が此处で気付いたとすれば、確かに動揺はあるのだろう。 \*「さばかり」は<相当程度に、大変に>。

「大将に\*見えたまふな(大将に御姿を見られなさいますな)。いはけなき御ありさまなんめれば(あなたは子供っぽい幼い御心持ちのようだから)、おのづから\*とりはづして(つい油断がある場面で)、\*見たてまつるやうもありなむ(大将がお見掛け申しかねません)」 \*「見え」は「見ゆ(見られる)」の連用形。 \*「とりはづす」は「取り外す」で<取り損なう>だが、敬語が無いので姫宮のウカツさによる客観事象の言い方と取る。 \*「見たてまつる」の主語は大将。

と、戒めきこえたまふを思し出づるに(と注意なさっていらしたのを思い出されなさって)、

「大将の、さることのありしと語りきこえたらむ時(大将があつた猫騒動があつた事を殿に申し上げた時には)、いかにあはめたまはむ(殿は私をどんなに軽蔑なさることだろう)」

と(と姫宮は)、人の見たてまつりけむことをば思さで(手紙の主の衛門督が宮をお見掛け申し上げたことに恥じ入りなさらずに)、まづ、憚りきこえたまふ心のうちぞ幼かりける(先に殿に叱られるのを恐がり申しなさる考えというものが幼かったのです)。

\*常よりも御さしいらへなければ(普段からも宮の御受け答えはないので)、\*すさまじく(折角の衛門督からの手紙だと言うのにそれ以上は、興も進まず)、しひて聞こゆべきことにもあらねば(六条院の妻である宮であれば、強いて返答を催促申し上げる事でもない)、\*ひき忍びて(小侍従が引き取って残念に思いながら)、例の書く(いつものように宮の御反応報告の返書を書きます)。\*「常よりも」は訳文に<いつもよりも(少ない)>とあり、「より」を比較基準の格助詞と取っているようだが、「御差し答へ(おんさしいらへ、御返事・御反応)」は少ないのではなく、無いのであり、この「より」は<時間経過の格助詞>で、「常よりも」は<普段から、いつもずっと>だ。下に「例の書く」と、これがいつものことという結びもある。\*「すさまじ」は<興ざめだ、ひどいことだ>という言い方だが、此处での語用には、語り手のとても残念な思い、みたいなものが込められている語感だ。私の変な思い込みかも知れないが、折角の衛門督の手紙なのに勿体無いにも程がある、みたいな声が聞こえる気がするので、そう書いて置く。\*「引き忍ぶ」は<人目を避ける>と古語辞典にあるが、此处で「人目を避けて」と特に言う意味はあるのだろうか。気のせいかも知れないし、上手く理由付けも出来ないが、是は「すさまじく」を受けた小侍従の<残念な思い>を言っているように見える。

「\*一日は(先日は)、つれなし顔をなむ(君が澄まし顔なのを)、めざましうと許しきこえざりしを(心外なものと取次ぎをお受け申さずにいようと思つていましたが)、『\*見ずもあらぬ(気にはしていた)』やいかに(とは宮に対して、なんとという無礼な物言いでしょう)。あな、\*かけかけし(全く馴れ馴れしい)」\*「ひとひは〜」については、注に<以下「あなかけかけし」まで、小侍従の返書。小侍従は柏木が女三の宮を垣間見たことを知らない。>とある。だから、小侍従が藤君の手紙をどう読んでいたのかを見なければならぬ。藤君は「一日、風に誘はれて御垣の原をわけ入りてはべしに、いとどいかに見落としたまひけむ。その夕べより、乱り心地かきくらし、あやなく今日は眺め暮らしはべる」と書いていた。藤君は、前半で蹴鞠での己が雄姿を自慢しつつ、後半で猫騒動以来宮が忘れられない、と口説いた心算だった。が、この気取った文句は、どうやら姫宮には通じなかつたらしい。が、それ以前に小侍従はそもそも蹴鞠の事も猫騒動も知らない。であれば小侍従は、「一日風に誘はれて御垣の原をわけ入りてはべしに」を、先日にあつた(のかどうかは明示がないが、あつたことにしなければ話が進まない)南庭での桜の花見の日のこと、くらいに思ったか。そして、「いとどいかに見落としたまひけむ」は、その花見が南庭だったので藤君は自分の姿が宮に見られたと思つて<私の風采が上がらないので、以前にましてさぞがっかりされたことでしょう>という謙遜の社交辞令を言つて来た、と取つたか。また、「あやなく今日は眺め暮らしはべる」は、是が在原業平の「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ」を引いた物言いと小侍従も知つて、その花見が寝殿正面の南庭だったので藤君が寝殿の母屋にいらっしゃるであろう宮を意識して、恋心が再燃したものらしい、と読んだのだろう。となると、この手紙を読んで顔を赤らめて、その後暗い表情をした宮の心証を、小侍従はどう解釈したのか。顔を赤らめたのだから、宮には「いとどいかに見落としたまひけむ」に心当たりがあつた。ということは、その日の南庭の花見の様子を、宮は廂の御簾内で御覧になっていたらしい。そして、いつものように気取つて、然して宮に興味もなさそうにしていたらしい藤君に、小侍従は苦勞して取り次ぐ熱意が冷めていたが、この手紙で藤君は無礼にも「見ずもあらぬ(宮の母屋の方を見なくてもなかつた=気にはしていた)」と言つて来たので、一応は宮に事実関係を確かめておこうと文を御覧に入れた。

すると、宮が藤君を見掛けなされた事は確からしいが、この手紙で軽んじられたと思ひ藤君を憎んだようだ。だから、もはや藤君に成就の目は無い、と小侍従は踏んだ、のだろう。多分、是が小侍従の目から見た、宮と藤君の日頃からの人となりを踏まえた判断だったのであり、それに基づくこの返信文面、に見える。なお、「めざましうと許しきこえざりし」の「ゆるす」は分かり難い語だが、「固辞」の逆と考えて、小侍従自身が連絡係をく引き受ける>と取って置く。 \*「見ずもあらぬ」と「見ずもあらず」とはだいぶ違う。作者はわざと小侍従に間違させた、のだろう。文章生を自負していそうなこの作者にして、「ぬ」と「ず」の違いを取り上げるは、和歌教室の趣だ。私は読書家ではないので、多くの語用に通じているわけではないから、ざっと語感でまとめるが、「ぬ」は心象状態、「ず」は事象状態、をそれぞれ示す語なのだろう。打消しや否定の語意は用言の未然形の方にあるように思う。だから、「見ずもあらぬ」は<見ないでもない>の意となり、「見ずもあらず」は<見たことは確かだ>の意になる。この紛らわしさは、二節の「見もせぬ」にもあって、業平の歌では是は<良く見えない←分らない>という意味の語用だが、是を<見もしない、見る気もない>という意味にする語用も有り得る気がする。つまり、それくらい一語一語の組み立てで文意が変わるものだという事を、此処で冗句風に作者は説いている、んじゃないかな。 \*「かけかけし」は<（形シク）いつも心にかけている。執着している。好色めいている。>と大辞林にある。訳文には<嫌らしい>とあり、場合によっては<しょってる、思わせぶりな、しつこい>などとも取れそうな曖昧な形容詞だ。如何にも誤解を呼びそうなこの言い方を藤君はどう取るのだろう。と、「かけかけし」い語り口。

と（と小侍従は）、\*はやりかに走り書きで（早合点して走り書きして）、 \*「はやりか」は<せっかち、軽はずみ、強気>などとあり、此処でもそのどれもが当てはまりそうに見えるが、詰まりは行き違いの誤解による<早合点>の成せるワザだった、と読んで置きたい。

「いまさらに色にな出でそ、山桜およばぬ枝に心かけきと（和歌 34-24）

「もう止めた方が良いでしょう、高嶺の花と諦めて（意識 34-24）

\*注に<小侍従の返歌。山桜に女三の宮を喩える。>とある。「折る」「投げ木」「花」とあったから、「枝」「山桜」「色」などと詠んだのか。ずいぶん突き放した言い方に見えるが、蹴鞠や猫騒ぎの事情を知らずに、宮の反応を客観判断すれば、こういう結論になるか。

かひなきことを（見込みはありません）」

とあり。

（2012年3月1日、読了）